

經濟論叢

第 135 卷 第 4 号

-
- 所有者會計にたいする代替會計の開発構想……高 寺 貞 男 1
- 「貨幣の非国有化」論：ハイエクにおける
「信頼」と「管理」……………二階堂 達 郎 12
- 運命愛——ニーチェの根本思想—— ……………山 中 浩 司 30
- 外貨換算會計基準の変更と多国籍企業の
ロビイング活動……………小 野 武 美 49
- 名誉教授インタビュー
堀江保藏名誉教授に聞く…………… 73
-

昭和 60 年 4 月

京 都 大 學 經 濟 學 會

《名誉教授インタビュー》

堀江保蔵名誉教授に聞く

1983年9月29日

京大会館にて

聞き手

角山 栄
(和歌山大学経済学部)山本有造
(京都大学人文科学研究所)

経済学会編集委員

降旗武彦
中野一新同事務局
細川元雄

中野 降旗(武彦)先生と私とが経済学会編集委員でありまして、主としてこの企画を担当していますので私の方から話を進めさせていただきます。

経済学部の教官会議において、以前に名誉教授の先生方にお話を聞き、『思い出草』という書物にしましたように、その後のご退官になられた名誉教授の先生方にお元気づちにお話をうかがい、学部の記録にとどめておくことが必要であるとの意見が出されました。それを受けて経済学会として具体的に企画してまいりました。前回は『思い出草』という単行本にまとめましたが、現在の経済学会は財政困難でありまして、すぐに単行本として出版するゆとりがありません。そこで『経済論叢』に掲載させていただくという形式で、記録にとどめさせていただくことになりました。

『思い出草』では静岡(均)先生、豊崎(稔)先生までお話をうかがっておりますので、その後にご退官された先生方のうち、ご存命でご年輩の名誉教授から順次お話をうかがうことにしております。まず先陣ということで本日、堀江先生にお話をうかがうことになりました。つづきまして岡部(利良)先生、出口(勇蔵)先生にそれぞれお話をうかがうことにしております。先生方には学生時代から大学を定年ご退官されるまで、研究のこと、教育のことを中心にお話を願うことにしておりますが、内容のことは名誉教授の先生と司会をして下さる先生方にお任せすることにしております。それではどうぞよろしく申し上げます。

角山 堀江先生には、私よりも先輩のお弟子さんがいらっしゃるのですが、経済学会の方から私の方にお話がありました。いろんな人に、井上(洋一郎)さんとか、三島

(康雄)さんと共に、この際にはよろしく申し上げますと声をかけてあったのですが、近くにいらっしやる、そして先生が一番最後のお弟子さんである山本(有造)さんをお願いして、今日二人でインタビューをさせていただくことになりました。先輩の方々はこのことのご了解をえましたうえで、参上させていただきました。

そこで、先生ご自身から略歴と研究分野のメモをいただきましたので、このメモにしたがって進めさせていただきます。

メモにしたがってインタビューは次のようになされた。

学生時代	経済学部長
講師時代	京大附属図書館長
助教時代	上野文庫のこと
日本経済史研究所のこと	同窓会のこと
そのころの経済学部と経済学会	東南アジア研究センターのこと
欧文紀要のこと	研究業績
「経済史」の講義	日本の近代化と近代企業家の研究
戦時下のこと	「家」の問題
教授時代	統計数字を利用した研究
敗戦と経済学部教育の総退陣	

学生時代

角山 先生と京都市立大学経済学部とのご関係については、なにしろ先生は学生時代からご退官されるまで、1925年から1967年まで43年間、経済学部の生き辞引きのような存在であります。先生の忌憚のない、ざっくばらんなお話を伺えたらと思っております。

早速ですが、先生が経済学部に入學なさいましたのが大正14年で、ご卒業なされたのが昭和3年でございます。その学生時代の頃のことを……。皆さんご承知のように先生は本庄栄治郎先生の日本経済史の演習に入れられ、本庄先生のご指導を受けられたのでありますが、同時に沙見三郎先生の財政学の演習にも参加しておられます。当時演習が正式の科目になった直後でございましたでしょうか、その辺も含めてお願いします。

堀江 私が京都大学経済学部に入りましたのが大正14年4月です。当時入学試験なんかはありませんので、第二高等学校から京都(帝国)大学経済学部に入學が許可になったからこのことを通知するというハガキが一本まいりまして、それで入学をするというわけでありました。大学生になりましたが、そのかたわら三高時代から弓をひいておりましたので弓道部に入りまして、半分教室、半分道場という生活をおくりました。2年生のとき、大正15年から演習が正規の科目としてはじまりました。演習につきましてはそれ以前に小川郷太郎先生がドイツの演習制度について『経済論叢』に2,3回お書きに

なったことがあります。それによって京大の経済学部でも演習というものはじめようじゃないかということになったらしいです。大正15年からはじまったので、私のクラスにはしたがって3年生の方もおられました。江頭(恒治)君なんかその一人です。

私が本庄先生の演習に入りましたのは、元来歴史というものが好きだったからということです。演習は1年限りででしたが、そのかわり非常に密度の濃いもので、たいてい第4時限目に組んでありまして、時間が過ぎててもなかなかやみそうにない。夕食を一緒に食べ、またやる。ということで場所は当時の学生集会所です。今外人の宿舎(近衛ホール、さらに現在は京大職員会館)になっているところで、そこに演習室にふさわしい部屋が2つありました。そこで食事をすることもできました。またそこが空いていないときは楽友会館ですというようなこともありました。またよくピクニックやハイキングにも出かけました。それで非常に先生との間、あるいは演習生同士が仲良くやりました。はじめて大学生になった気持がしたのが演習でありました。はじめの演習は、本庄先生の『日本財政史』の本が出版されたときでありまして、それを前期の間輪読しました。後期は自分たちで徳川幕府の財政についての特別なテーマを選んで勉強し、研究報告をしろ、ということでありました。私は確か財政と米価ということで、米価のグラフを作りました。そのときは多少数学的なことをやったのでしょうか、グラフを指ざして、「この時期に財政が非常に苦しくなって、改革がおこなわれたんだ」ということを報告したのを覚えています。なお、夏休み中に郷里に帰って、古文書を見て何かやってこいということで、私は丹後に帰りまして、出良川の鮭漁業のことを古文書で調べたり、古老に聞いたりしてやりました。黒羽兵治郎君と大山敷太郎君の2人が東海道の宿駅の助郷の研究をして、非常に立派な研究報告をやりました。これは卒業直後に『経済論叢』に両名とも出しています。それほどのものですから、本庄先生の演習には、汐見先生が出席される、中川(与之助)さんが出る、農学部の黒正(巖)先生が来られる、彦根から菅野(和太郎)さん、藤田敬三さんも出る、このような偉い人たちが出て、寄ってたかってたきのめすのです。だから鍛えられるはずです。こうして一年間みっちり鍛えられるという密度の濃い演習でした。

これで一応本庄先生の演習が終って、3年では汐見先生の演習に入りました。これは財政学演習であり、私は確かイギリスのバスターブルの著書だったと思いますが、公債論をとりあげ、内容の一部を報告したのを記憶しています。

それから卒業期の話になりますが、卒業後の身の振り方を汐見先生のところへ相談に行きました。当時は不景気になる少し前の時でしたけれども就職はかなり難しい時でありました。昭和3年といいますと前年の金融恐慌のあとで、いわゆる昭和恐慌のはじまりかけた年であります。そこでどうしたもんだらうと汐見先生に相談すると、取るべき

道は三つある、一つは官吏になる、一つは実業界に入る、一つは先生になる。官吏になるにはお前は貧乏やからあかん。(笑) 上役に挨拶に行かなければならないが、それには金がいる。実業界へ行くにはお前はちょっと気が弱すぎる。(笑) 学校の先生になつたらどうだと。当時経済学部を出ますと高等商業学校という受け皿がないではなかった。大学院に残り、少し勉強をして高商の先生にでもなりたいたいと思った。それでは何を専攻するのかと聞かれたので、私は歴史や地理が好きだから本庄先生のところへ残してもらえたらと。それで本庄先生のところへ行きました。まあとにかく残ってもよいということで、大学院に入って勉強させてもらうことになりました。

角山 それが昭和3年5月、経済学部の副手になられたということですね。

堀江 当時副手には岩井奨学金がついておりまして、月50円をもらいました。それが1年間、次の年に特選給費生に選ばれ、月75円をもらいました。大学院は結局2年間でした。その2年目の時に中谷(実)さんが三和銀行にいていたのを汐見先生に呼び戻されて、昭和4年から講師になられました。したがって中谷さんとは卒業は同期でしたが、講師になったのは中谷さんの方が1年先輩です。

角山 それから先生の講師時代がはじまるわけですが、その前にお聞きしたいのです。今私は和歌山大学におります。京大と非常に違うのは卒論というのが各地の大学で単位になっておるわけですが、京大はいまだに卒論というのがないように聞いております。それはどうしてでしょうか。

堀江 卒業論文というのは聞いてはおりました。文学部は非常に厳格な卒業論文を課しておりました。しかし経済学部と法学部とはない。別にないことが問題にならなかった。

角山 ということは演習の内容が非常に充実しているの、それで特に卒論を必要としないということでしょうか。

堀江 いや、はじめからないでしょう。

角山 先程の大山先生たちの助郷の研究がいわば卒業論文として『経済論叢』に載るといふ、そのように論文を書くように指導されるのですか。

堀江 しません。その証拠に、演習がはじまる前の卒業生もそうでした。卒業論文を書かされた先輩から聞いておりません。

中野 これは法学部もなかったのですか。

堀江 ありません。ともかく私たちの入った時は学年制度で、一科目落しても落第する。私の入った年に科目制度に改まった。それで私はまあ進級できました。卒業論文とかではなく、ルーズでしたよ。それでよかったんじゃないですか。勉強する者はするし、せん者はせんし、自由放任でした。

中野 一つお聞きしたいのですが、大正8年に法学部から経済学部が独立した。先生がお入りになった頃はまだ分離したてで、法学部の先生との交流、講義のうえでの交流とかはどんなものでしたでしょうか。

堀江 法学関係の講義は法学部と共同講義でした。ですから憲法は市村（光恵）先生の『帝国憲法論』という大きな本で、今の法経第1教室で法学部の学生と一緒に聴きました。それから行政法は佐々木惣一先生の『日本行政法論』という本で学ぶ、民法は中島（玉吉）先生で、『債権総論（民法積義卷之三）』です。これらは週に3時間、憲法は5時間程ありました。ところで週2時間で1単位とするという単位制度は戦後のことです。戦前は科目制度でしたから、科目によっては、例えば経済原論なんかは週に6時間もありません。

河上（肇）先生の経済原論講義なんかはフルスキャップ4帖綴りのノートにびっしり2冊になりました。それは1年です。それで試験をする。河上先生の試験問題で今覚えているのは、「労働の生産力の発展が労賃、利子、利潤、地代に及ぼす影響を論ぜよ」ということです。（笑）そのかわり先生によりましては10～20ページ程のものもありました。財部（静治）先生の統計学がそれです。統計学の序論が全部終わっていないのです。そして試験問題に何が出るかといいますと、「男女道行きを統計にとりたればとて、その恋愛関係を断じうるや。」（笑）そして次の次の年でしたか、「中」という字を黒板に一つ書かれました。これが試験問題です。中位数とか中数値とかが統計にありますね、これを書けということです。こんな面白い先生が多数おられました。それ故学校というものは面白かったですね。授業でも、例えば河上先生は等価形態をいうときに、袂から秤を取り出して、（先生はたいてい和服でした）、これに煙草を載せ、釣り合せて、これが等価というものだと。（笑）

講 師 時 代

角山 面白いですね。……そこで先生は講師時代に何をおやりになったのですか。

堀江 外書講読です。学生は、英書ならば、1年でミス、2年でリカード、3年でミルと、きまっていたのです。これらをすべてやりました。ドイツ語ももたされたのですが、それは京人で編纂された“Lesestücke für die Nationalökonomie”のカッセルの外国為替論かなんか、もう一つはベーム・バベルクの利子論でした。こんなものを読んだんです。講師になって3年目からテキストの選択を教師の自由にしてよろしいということになりましたので、私はアメリカのことに多少関心を持っていましたから、フォークナー（Faulkner, H. U.）のアメリカ経済史という、これは労働者向けのテープ・エディションですが、これをテキストにして2年間やりました。こうしている間にアメ

リカ研究というテーマに入ってきました。ドイツ語は、カール・ディールとパウル・モンベルトの編纂した“Arbeiter und Maschine”を読んでおったことを覚えていません。

講師時代は外書講読一点ばかりでした。助教授時代になりましても、やっぱり外書講読担当でした。

角山 先生の講師時代に、アメリカ経済史は外書講読を通じて関心をおもちになったのですが、日本経済史の方のご研究は、丁度その頃に黒正先生の研究所が昭和8年で、そのことと関係して同じく講師時代に、『我国近世の専売制度』をお書きになった。それが昭和8年ですね。

堀江 そうです。それはあとで申してもよいのですが、私の専攻は日本経済史でした。はじめにやりましたのは徳川時代の寺社名目金、すなわち門跡寺院などの由緒ある寺やお宮が祠堂金というのを集め、それを貸すのです。御用商人に委託しているのですが、御用商人は自分のお金を祠堂金の名において貸し、利子を取る。その研究をやりまして、それを『経済論叢』に載せてもらいました。これが大学院の同期生より早かった。それがメリットになって私は講師になった。それ以上のことはなかったのです。私より一つ先輩に江頭君などがいましたけれども、業績を出すのがおそかったんですね。それで私の方が高商に行かず京大に残った。

助教授時代

日本経済史研究所のこと

山本 昭和3年に大学院に入られて、そこから学問の道に入られる。結局本庄先生のご門下に正式に入られることになるのですが、今お話のあった昭和8年に日本経済史研究所ができていますけれども、昭和4年に経済史研究会が本庄先生をリーダーとしてできて、雑誌『経済史研究』が創刊されているのです。これを今ふりかえりますと、経済史関係の雑誌の『社会経済史学』なんかよりも先きの、日本で最初の経済史専門学術雑誌ということになります。このことを含め、また先きの演習を含めて、本庄先生の門下生へのご指導などについて……。

堀江 先程のお話のついでにすればよかったのですが、先程申しました演習をこのまま解散したのではもったいない、おいしいというので、本庄先生を中心に「経済史研究会」なるものができました。昭和4年に雑誌を出そうということになり、『経済史研究』ができました。イギリスには経済史専門の雑誌があるけれども日本にはないということでできたわけです。これはやがて日本経済史研究所へ引き継がれますが、ここで研究所のことにふれておきます。

日本経済史研究所は、本庄先生の肝煎りで、黒正先生が私財を投じて建てられ、昭和8年5月に開所式を挙げました。場所は北白川追分町で、いま農業簿記研究施設になっています。研究所には5、6人の有給所員がいました。私はすでに京大に職を得ていたので、無給の嘱託所員として参加しました。おもな事業は、月刊機関誌『経済史研究』の発行、「研究叢書」や「史話叢書」の編集発行で、私の『我国近世の専売制度』、『アメリカ経済史概説』は研究叢書として発行されたものです。しかし、何といっても大きな事業は『日本経済史辞典』の編纂でありまして、本庄先生のもとに、若い多数の所員が一致団結したからこそ完成しえたものだと思います。

研究所の仕事は終戦時まで続けられました。終戦後、建物が進駐軍に接收されて士官用の住宅になり、研究所の中味は、黒正先生が再建のために私財を投じられた昭和商、いまの大阪経済大学へ引き取られました。そして、『経済史文献解題』（年鑑）を引きつづき編集発行して今日に至って居ります。

話はもどりますが、『経済史研究』という雑誌は随分面白いもので、論説は勿論、講座欄があり、トピック欄もあり、それに文献目録がある。とくに文献目録には日本の文献だけでなく、外国雑誌の日録もひろいまして、毎月採録しました。書物は勿論論文についてもこれはというものには紹介文を載せました。こんな雑誌はちょっとないと思います。講座欄がありまして、そこで私は先程のアメリカ経済史概説を何回かに分けて連載しました。それを纏めて補整し、昭和12年に本にしたわけです。その前に私は何をやるかという専門のことで、結局諸藩の国産専売のことを研究することになりました。丁度経済学部図書室には、ありがたいことに、地方史誌がたくさん集まっている。これは本庄先生のお手柄だと思うのですが、この地方史誌を片一端から繙きました。また本庄先生のお伴をして、東京の旧佐賀藩主、宇和島藩主、山口藩主、鳥取藩主などのお屋敷へ行き、所蔵の文書を見せてもらいました。そして専売について、全体的な見透しと藩別のもとを集めまして、これを本にしたのが昭和8年の『我国近世の専売制度』です。これが専売研究の最初の著作ではなかったかと思っています。

そのころの経済学部と経済学会

山本 その頃をふりかえってある人が「京都学派」という名前を付けていますように非常にたくさんの優秀な方々が本庄門下に集まられてメッカをつくられた。どうしてですか。

堀江 あのね、「京都学派」という言葉は経済学部のことだけでなく、主に哲学の方ですが。京大では黒正先生あたりが歴史学派のメッカだと、そうしたら河上先生が揶揄して、いまごろ歴史学派でもあるまいと。（笑）

山本 しかし京都学派の中には、まさに歴史学派のニュアンスも入っている。

堀江 入ってます。あの当時、事実をなるべくたくさん集め、事実をして語らしめようというのが基本的態度です。ですから歴史学派には方法論がないということで揶揄されたわけです。マルキシズムのような方法論はありませんからね。

山本 ある人がその当時の大学院およびその周辺で、京都大学経済学部の中で、一方では「本庄カルテル」というのがあって、他方では「小島トラスト」があって、若手が皆で雑誌をつくり、演習をやり、研究会をやっていたことを書いていましたが。

堀江 それはちょっとわかりません。本庄カルテルなんていう言葉は今始めて聞きました。勿論小島トラストも。小島昌太郎先生はまず交通論をやった人で、『海運同盟論』が学位論文になったのですが。保険論では日本で保険の意味を一つの社会的な仕組みであることを主張された。それまでの保険論は法学の立場から、保険契約のこととして説かれておった。そうではなくて、共通準備財産をつくるのが保険の仕組みだといったのは小島先生がはじめてでした。それから小島先生は金融をやる、経営学をやる。それでいろんな方面のお弟子さんがたくさんおられる。それを目してトラストと言ったのかも知れません。(笑)たくさんおられますよ。中谷さんも半分は汐見先生ですが、半分は小島先生でしょう。経営学では、『経営と経済』という雑誌を出しておられました。

角山 今の先生のお話を聞きますと、その当時、京大の経済学部は非常に活気に満ちていた。そして経済学会というと……。

堀江 経済学会は毎月1回例会があり、例会となると大学院の学生と教官はほとんど全員出席した、報告者はちょっとのへまでもしょうもんなら、あっちからつつき、こっちからつつき、大へんなものでした。時間が昼間はありませんから夕食後楽友会館でやるのです。会館の閉館時刻ぎりぎりまでやったこともあります。あるときなんか、丁度紀元節の頃でしたか、会が終って外に出たら雪が積り、北風が強く吹いているんですよ。その時私は上御霊の方に移っておりまして、真っ直ぐ帰れないんです。それで東山線から丸太町通りを通して烏丸に出るという迂回をして帰りました。その時はこの世の地獄じゃないかと思ったほどです。そんなことで雪が降ろうが雨が降ろうが経済学会があったら出席したもんです。

角山 出席者は教授、助教授、大学院学生……。そうしますとどれぐらい集まったのでしょうか。

堀江 だいたい30人から34~5人はおったでしょうね。

山本 それで月1回、年に今と同じように1回の大会が……。

堀江 そうです。年1回の大会がありました。大会というのはどういうことかといいますと、経済学部を卒業して他の大学、高等学校、高等商業学校等で教壇に立っている

人が皆集まって親睦の意味を兼ねてやろうということからはじまったのですが、だんだんやっているうちに、その中味に、京大に戻ってくる人を選考するような意味がでてきました。それは結果においてそうなのですが。例えば、静田（均）君は京城大学におりまして、それで『朝鮮経済三十年』（岩波書店）という本を書いている。これと同じような内容のことを経済学会で報告する。穂積（文雄）さんは何を報告したでしょうか、多分中国の思想史でしたか。それから徳永（清行）さんは中国の銀の問題でした。あの報告は立派だ、あれは立派な人物だ、京大へ帰って来いというように、助教授で京大へ戻されたらいいです。そういう風に経済学会の大会は利用されたい。よく知りませんが、あとで考えてみるとそうなっています。生え抜きじゃなしに外からきた、私みたいにずうっとインブリーディングでいるよりも、外で修業をしてきた人の方がいいんでしょうね。わかりませんが、アメリカあたりでは自分のところの卒業生をめったに採りません。

角山 何か経済学部の15周年、20周年記念の催しについても……。

堀江 そのことですが、本庄先生がおられたということがありますが、展示会がありました。けじめけじめにいつでも展示会をやっていた。

角山 例えばどういう展示会ででしょうか。

堀江 これはね、古典、稀覯書です。経済学部は随分持っていますからね。スミスの『国富論』やマルクスの『資本論』の初版本、それからマルサスの古い版など、そういうものを展示するのです。場所は図書館の展示室や現在法学部の有信会があります部屋を使ったんです。多いときには本部の講堂を使ったのです。経済学部の展示会は有名でしたよ。町の人々が多く見にきました。主に洋書で、和書は明治時代の和綴り古本、翻訳書では例えば『李氏経済論』などを見せるのです。学生も喜んで見にきましたよ。

それと講演会ですね。講演会が年に1回位公開でやっていました。そうですね、経済学会大会で研究報告会と公開講演会をやっていました。公開講演会の講師の1人は外部から招聘しました。それから国際統計協会の大会が東京でありまして、その流れでツェーン博士など統計学の偉い学者が京都にやってきた。それで統計学の講演会をやった。またシュンペーターがやってくる。ウィットホーゲルも来たんじゃないですか。偉い人がちょいちょい来ました。

欧文紀要のこと

堀江 ここで触れておきたいのは、欧文紀要“Kyoto University Economic Review”のことです。大正15年から国費で出版されて、その後長らくわが国で唯一の欧文経済雑誌でした。それが外国人に興味を与えたのは、もちろん、日本の経済に関する論文です。本庄先生の日本経済史・経済思想史関係の論文は、外国におけるその分野の研究に

大きな刺戟になりました。しかし、私たちの記憶に新たなのは、敗戦後の日本経済の民主化にかかわる論文があったことです。その一つは八木（芳之助）先生の農地問題に関するもので、それが農地改革に利用されたのです。もう一つは汐見先生の所得税に関する諸論文で、それを読んでいた例のシャープ博士は、日本へ来て、先生を顧問のような地位につけ、そうして、所得税を支柱とする新税制を立てたのです。

「経済史」の講義

角山 そうして本庄先生が昭和17年に退官なさいます。そのあと先生が経済史の講座を担当されましたか。

堀江 いや、もうちょっと前からしていました。といいますのは本庄先生が経済思想史の方へいかれてまして、それで経済史はお前やれということで、日本経済史と経済史概説とをやっていました。その前に特殊講義としてアメリカ経済史と『日本資本主義の成立』というのをやり、本にしました。それは助教時代です。そんなわけで日本経済史もやらなければならない、経済史概論もやらんならん、経済史概論をやると西洋経済史を主にやらなければならない。そして西洋経済史をやって、昭和24年に『西洋経済史概要』を書きました。

角山 あの当時は大体経済史というのは一本になっていたんですね。今のように日本経済史と西洋経済史とに分けていないんですね。

堀江 経済史というのが主な科目です。副みたいな形で日本経済史が置かれていました。

中野 その経済史というのは中味は何なのですか。

堀江 経済史の方法論とそれから経済発達の概要ということです。私があとから『経済史概説』を書きましたが、その中味がそんなんです。

中野 それでは日本経済史の人と西洋経済史の人とか本庄門下で一か所て議論をやっていくということになるのですか。

堀江 それはなかったです。本庄門下には欧米の経済史をやっている人がいなかったから。

山本 むしろ本庄先生がお弟子さんに二つづつ専門をもたせる。日本経済史は主流だけれどもアメリカ経済史をやる、フランス経済史をやるのが本庄門下の特徴ではありませんか。

堀江 西洋経済史専門家というのはおりませんでした。

中野 今の研究状況ですと二本立ては考えにくいですね。

角山 だから先生はアメリカだけでなくインドもおやりになった。

堀江 インドは講義としてはやらないですが、『経済史研究』誌に「インド経済史概

説」(連載もの)を書いたことがあります。

中野 それは本庄先生の指導方針でしたか。

堀江 そうでしょうね。日本経済史をもとにして他のことはこれこれをやれと。

角山 あの頃は分かれていなかったのではないのでしょうか。野村兼太郎さんもそうでしたし、高村象平さんもそうでした。はっきり分かれたのは戦後でしょうね。

堀江 野村兼太郎先生ははっきりとイギリス経済史です。日本経済史の方へ関心をもちなおしてやった人ですね。経済史の先輩というと平沼淑郎先生、内田銀蔵先生、滝本誠一先生たちですが、内田先生も滝本先生も日本経済史をやった人で、皆方法論と中味とを一本でやっておられます。それ程学問が簡単だったんですね。

戦時下のこと

角山 それから昭和17年以後は戦時下に入るわけです。その戦時下に私は昭和17年9月に入学したのですが、入るなり私は、訓育指導班というのが当時あり、丁度堀江先生の訓育指導班に入ったわけです。大野英二君もいっしょです。これは上からの割当てでしたんでしょね。

降旗 ありました。私も同年で同じで、私は大塚一朗先生だったかと思います。

角山 そうして学徒動員がその翌18年12月1日でした。私は2年生になり、堀江先生のゼミに入り、そして12月1日の学徒出陣まで毎週かあるいは週に2回位演習を、これでこの世のお別れだということで非常に熱心にやりました。あの時のテキストが……。

堀江 本庄先生の『先覚者の南進論』というものでした。それを輪読したんです。その時私の家へ来てもらいました。週に一度か二度来てもらいました。4~5名でしたか。

角山 多いときには7~8名でした。ぼつぼつと最後の方は抜けていきました。

堀江 終いの頃は寂しいものでした。それから昭和18年には早々に勤労作業がはじまりました。最初の勤労作業は軽いもので、どこかの鉄道沿線の草刈りのようなものだったと思います。当時学生課長(いまの学生部長に相当する)をしておられた八木(芳之助)先生が引率して行かれました。そして現地へ雨にうたれ、風邪をひかれた。これがもともと八木先生は病気になるれまして、それでお亡くなりになりました。あとからの話にでると思いますが、八木先生は温厚な人であつ非常に秀でた人でしたので、この人がちゃんと生きておられたら経済学部の総退陣ということはなかったと思うほど偉い人でした。八木先生は木津の豪農の出で、大地主でした。惜しい人を早く亡くしたものです。

降旗 私たちが入学したとき八木先生が部長でした。入学のとき八木部長の前で署名をしましたが、手がふるえましたよ。

堀江 八木先生はしっかりした人ですし、温厚だし、それで学生課長にひっぱり出されたのでしょうか。

それから学徒動員がはじまりまして、授業も半分はないような状態でした。兵隊にとられない学生は、言葉は悪いけれども弱体班と呼ばれ、むろん集団で勤労作業に出るのです。一番はじめに行きましたのが豊川の海軍工廠です。これは法経文の3学部が共同で行きました。その次に、あるいは前かも知れませんが、江州の東の方へ何か溝漕みたいなことに行ったことがあります。その次に行きましたのが宇治の陸軍火薬工廠で、火薬の原料を貯蔵するプールのようなものを黄蘗山の裏山に掘るといふことで、先遣部隊としてやらされました。最後に行きましたのは滋賀県今津の干拓作業場で、そこで終戦になったわけです。

この勤労作業に誰か教官が付いて行かなければならなかった。白杉庄一郎君と私は比較的勤勉であるし、体もよいしということで、いつでも先遣部隊について行かされました。そこで向うとの交渉をして、作業内容はこう、作業時間もこうこうというふうアレンジして、次の人にバトンタッチをするということだったのです。ところが、そうした勤労作業に行くのは助教授なんです。どこへ行くのかは教授の人が決める。これではけしからんと、助教授たちが文句を言いに行った。少なくとも勤労作業についての相談には助教授も加えよと。それが結局承認されて、今の教官会議のようになったのです。

助教授の方も相当悪いことしてましてね。中谷君や白杉君、静田君や穂積君たち、当時の助教授連中が毎日どこかの家へ集まっていっしょに飯を食う会をやっていました。家へ呼ばん人はどこかの料理屋へ連れていく。簡単でいいからと、物のないときでしたから。そして廻り持ちしていますと教授の耳に入り、あれはけしからんじゃないかということを言われたことがありました。私の処へ来てもらったときには、その頃鶏を飼っていて、それを料理し、すき焼をして食べたことを思い出します。その頃の助教授は教授の方から見ると、こいつらは曲者だと思われたんじゃないですか。

丁度その頃、昭和18年の3月いっぱい満州へ行ってこいと言うことになりました。助教授になりました昭和9年でしたか、海外留学が差し止めになりました。自然科学の方は昭和11年まででしたが、人文科学の方は昭和9年から留学差し止めになりました。それで私は留学の経験がありません。その代りに探検旅行とかいうのが教授にあったのです。その分け前をもらったのでしょうかね。昭和18年3月に朝鮮、満州に探検旅行に行つてこいということでした。それで1,000円をもらいました。1ヶ月分に。200~300円は自分のお金を足しましたけれども。3月1日に出発して、31日に帰って来ました。

朝鮮は京城から平壤、満州は旅順、大連、鞍山(昭和製鋼所があった)、奉天、撫順、新京(長春)、哈爾浜、吉林とまわり、吉林では豊満ダムの発電所の送電開始式に出会いました。吉林から東に廻つて清津から元山、その前の興南で日本窒素の硫安工場を見学し、京城に帰ってきました。法学部の佐伯(千仞)君と一緒に行き、彼が途中で病気

したものですから、私一人になりました。京城でも奉天でも大和ホテル、汽車は二等でしょう、寝台車なども。それで1,200円程で行けたんです。当時1,000円というのは値打ちがあったんですね。

無事にひと月旅行をして帰ってきました。帰ってまいりまして、「朝鮮経済の近代化」と「満州経済管見」というのを経済学会例会で報告して、『経済論叢』に載せました。

教授時代

敗戦と経済学部教官の総退陣

角山 それでは、ちょっと先きに進みたいと思います。あとで振り返ることもあるかと思いますが、終戦を昭和20年8月に迎えるわけですが、先生はすでにそのとき教授におなりになっていたのですね。

堀江 昭和20年3月に教授にいただきました。それで教授として終戦を迎えたわけです。終戦を迎えましたのは、先程言いましたように勤労作業に出ていたときです。それで終戦の招勅は聞かずに済みました。

角山 私は丁度経済学部の事務室の前のところで聞きました。私たちは弱体班でして、30人程が前日に明日12時に集まれということがありまして、そこへ集まりました。当時蛸川先生が学部長で、ゲートルを巻いた姿でした。経済学部のラジオは何か古くて玉音も聞き取り難かったのですが、一応聞きました。しかし何を言っているのか皆でよくわからないと言っていました。

それから私は昭和21年3月まで学校におったのですが、丁度その間に経済学部の総退陣というのがあったのです。先生は教授としておられたわけですが、当時静田先生と一緒に教授になられたのでしょうか。

堀江 どうでしたか、静田君の方が先きになっていたのではないのでしょうか。

山本 静田、堀江、穂積の三人の教授だけが残って……。

角山 その時いろいろあって経済学部の総退陣があり、全く新しい体制が出来たのですが……。その辺教授としてご出席になっていた先生のお話をできたらお伺いしたいと思いますが……。

堀江 その話は今でも疑問に思っておりまして、先程も言った八木さんがおられたらあのことは起こらなかったのじゃないかと思えます。誰がどこでどうして仕組んだ芝居なのか、ということについては遺憾ながら私は知らないのです。兎も角教授、助教授、講師皆出てこいということです。日本の敗戦についての反省会をするというので出てきました。そうしますと堀江英一君だったか、白杉君だったかどちらか忘れましたが、

一億総懺悔と経済学部の敗戦の責任を取るということで、総退陣をする、そして悔い改めるといふのか、そういうふとをすべきじゃないかという発言があったと思います。どういう風な方法でやるかと言いますと、まず新しい学部長を選んで、そしてその学部長に全員が辞表を出すということが決まりました。投票した結果、静田君が選ばれました。そこで皆が辞表を出しました。結局静田君は確か6人の辞表を取り次いだと思っておりますが、その中には谷口吉彦、蛭川虎三、小島昌太郎、汐見三郎……あと二人誰か忘れましたが、そのへんが申達されました。ところが申達の内容について不満をもった人がありまして、その人達はやめていったのであります。

そのことがありまして、私は敗戦の責任云々については何故、どういう意味で敗戦の責任をとらねばならんのかということではいろいろな考え方があると、当時の人々と話しておったのですが、これは結局保守派と進歩派との内部争いではないか、あのままでは責任を負えない、将来の立直し以後にもそれらが不満の種を残す、それでそれを取り除くためにやる、ということになっておるのです。それで保守派とは誰であるかという、申達組の中にある小島さんを中心に、進歩派とはこれはわからんのですが蛭川さんも入っているし、谷口さんも入っている。

ところで、そうであったかどうかについては私は疑問にしているところです。私なりにいろいろなデータを、と言いましても確かなものではなく、証拠を出せと言われても困るのですが、争いというのは実は保守派と進歩派の争いじゃなしに、進歩派の中における主導権争いが主因じゃなかったかということです。その後の教授会ではやっさもっさしていました。その間に、ほぼパラレルに例の公職追放令が出てきました。

角山 それは昭和21年2月の頃と思いますが。

堀江 そうです。それで公職追放令が来ました。一つはメモランダム・ケースとって天下りの的にこの人はいかんと言ってくるのです。

角山 A項とっていたものですね。

堀江 そうです。A項とって名前もすべて入っていました。それで名前を言いますと、谷口さん、石川(興二)さん、柴田(敏)さん、それから中川(与之助)さん、それに松岡(孝児)さん、徳永(清行)さんです。それからその他のものはお互に審査して、そして負うべきものは負えと。それで適格審査委員会というものが出来ました。静田君の『思ひ出草』の中に入っていますが、静田君と私と穂積君と助教授の代表青山秀夫君との4人で構成したものです。これはお互に自分の著作などを検討し合って、お互に審査委員として適格であるかどうかをまづ決めて、それからほかの人の適格審査をすることになりました。そこで対象になりましたのは全部ですけれども、これはいかんと言ったのが、大塚一朗教授と高田保馬名誉教授と二人でした。両方とも苦しかったですよ。

それで大塚さんが不適格となって、結局学部は教授が、静岡、穂積、堀江と三人になってしまいました。そこで急遽何とかせねばいかんということで、はじめに豊崎稔さんと呼んできました。その時私は条件を出したのです。他から呼んでくるのはよいけれども、内から出すようにと、そして中谷、青山、佐波(宣平)の三君を出してそれが通りました。豊崎さんに次いで岸本誠二郎さんが外から呼ばれ、こうして徐々に充実していったのです。

中野 適格審査委員会の委員長は静岡先生ですか。

堀江 静岡君です。学部長ですから当然委員長です。

角山 ちょっと何うんですが、お互に審査し合えというのはどこからか指令がくるのですか。

堀江 これは当局からきたんです。それは民主的にやれというんです。上から、占領軍からきたんです。はっきりしたのは俺がやるけれども、はっきりしないのはお前らが民主的にやれと。これがアメリカの民主主義だということです。その当時各学部とも審査委員会が置かれたのですが、あとから聞いてみると、他にも不適格をちょいちょい出しましたが、結局経済学部が一番厳正であったのだそうです。

角山 その対象は教授だけでなく、助教授も？、そして講師、助手は？

堀江 助教授も。講師、助手は入らなかったでしょう。指導者という意味がありましたから、主として教授、助教授でした。

新制大学の発足

角山 そういうことで経済学部が再建になったわけですが、暫くすると新制大学の発足になるのですね。

堀江 昭和24年の4月です。そこでは入学試験をどうするかということが大きな問題になりました。鳥養総長が経済学部で試験のことをよく知っているのは堀江だということで、ひっぱり出されました。各学部から一人ずつ専門委員を出して、そして京大では京大独自の試験制度を考えました。その時、例えば経済学部の問題(回答)用紙、表紙を付けて真中からミシンを入れた今でもあるもの、これなんかを経済学部からもっていき、京大全部の試験に適用しました。鳥養総長が委員長で、私は副委員長、それを2年位やりました。その時は問題作成委員会の座長になったり、採点室へ慰問に行ったり、試験期中はなかなか手が離せませんでした。

中野 先生は何故入学試験にお詳しくったのですか。

堀江 さあ、わかりません。経済学部が選出したんですよ。あいつは何でも出来るって選んだんでしょう。(笑)

その当時進学適正検査というのがあって、進適にある程度の点数をとっていないと本

試験が受けられない、いわゆる足切りがありました。経済学部では私が副委員長の地位にいたものですから高いところで足切りをしました。何故足切りをしたかといいますと、もっぱら試験場の都合でしたよ。立命館を借り、本学を使って2か所でやりましたが、まだ収容しきれないということで、足切りをやったのです。各学部の足切りが揃ってなくて、経済学部が比較的高かったのは、私が遠慮せざるをえなかったからです。

降旗 進適の採点をさせられました。僕らは大学院のアルバイトとして。(笑)

堀江 それは新制ですね。新制大学院が発足したのが昭和28年ですね。その時私のクラスにおったのがいま関西大学教授でいる小林英夫君です。彼はアメリカの労働問題、AFL-CIO のことをもっぱら研究しております。

山本 その方が先生の最初のお弟子さんですか。

堀江 そうなんですね。しかし新制大学院ですからね、弟子もへちまもないんですね。

角山 その時に外人のいわゆる研究生がおられましたね。学部では先生の場合が第1号じゃなかったか。

堀江 あれはね、昭和28年より早かったですね。カリフォルニア大学の大学院生(博士課程)で、チャールズ・シュルダンという人が来まして、今ケンブリッジ大学におりますが(1985年1月死去)、日本の徳川時代における商人階級の抬頭というテーマで一生懸命やりましたよ。私の研究室に机一つを与えまして、毎日来ていました。しまいとその大学からいわゆる通常試験をしてくれと言って来ました。それで私が時間を限って試験をしたんです。つまり論文のほかはまだ学年試験が残っていたのでしょ。それをしてくれというのです。それでそばにおるのがいやだし、カンニングすることもなし、時間が来たら来るからそれまでに書いておけとやってやりました。その答案を送ったりしました。

山本 それはどういうことですか。シュルダンに試験をしたというのは。

堀江 大学の試験です。単位が残っていたわけでしょう。

山本 ああ、向うの大学に代って先生が単位認定の試験をしたわけですか。シュルダンの試験を日本でやったわけですか。

堀江 そうです。

山本 余分なことですが京大人文研で客員部門をつくりました。その第1号で彼に一年来てもらいまして、彼はそれが最後でケンブリッジを退官しましたけれども、イギリスでは日本経済史の大御所です。

堀江 そのあと外人と言え、韓国の人で、大阪商大を卒業した安(秉珩)君が来たり、カナダからきたバートン、イギリスからデビッドソン、アメリカからピーター・

フロス、台湾から林（善義）君、彼はいま名古屋学院大学の教授です。ベトナムからブ・トアン（Vu Toan）君がきていました。私の研究室には誰かよその国の人が来ていました。ブ・トアン君なんか実にきれいな英語を話す人でして、私の英会話を大分彼に助けてもらいました。角山さんが留学するときに……。

角山 そうです。私が留学するとき会話を勉強させてもらいました。私がイギリスへ行ったのが昭和38年なのですが、その頃まで京大の経済学部にはたくさんの外人が来ていたんでしょ、堀江先生のところが一番多かったでしょう。

堀江 多かったんです。ともかく外人が興味をもったのが日本経済史でしたから。

経済学部長

角山 ところで、先生は昭和29年、30年に経済学部長をなさっておられますね。そのときにはかなり堀江学部長に風当たりがきつかったんじゃないかと思うんですが。

堀江 そう。ということは今でも学部長は一年交替でしょう。私は2年続けてやりました。これはあとでどういうことかを話しますけれども、今言われたように風当たりが強かったです。それで部長を選ぶ教授会の時に大学院の学生が10名ばかり来ましてしょうか、会議室の前へ来て、「堀江学部長絶対反対」とやったですよ。その時に投票がありました。結局私と松井（清）君とが同数になった。それで籤引きをやり、私が当たった。それで私は部長を引受けました。私の前は穂積さんでしたか、その時分の教授会は時間が長くかかりすぎていた。そこで最初の教授会における就任の挨拶の中で、秩序を立て直しをしますと、大分強い宣言をやりました。秩序を立て直す方法としてあれこれ考えましたが、その一つは、評議員に前々週に来てもらって、どういうことを議題にするか、議題の順序をどうするかということを相談することで、それによって会議の通知を出すという慎重な態度をとりました。

降旗 そこからはじまっているのですか。つまり今の……。

堀江 そうですか。多分そうだと思います。秩序をつくるにはまず部長と評議員とが何を問われても同じことが言えるようにしておかなければならない。これが第一着手でした。それからもう一つは経営学科を分けるということでした。これには教授だけの会を開いたり、助教授だけの会を開いたりして、了解をとりつけるのに何回も開き、大分苦労いたしました。何故こういうことを考えたかと言いますと、経済学部が講座増設の要求を毎年出すのですが、文部省が一向に取り上げてくれない。言っちゃ悪いですけども、そのころ経済学部は文部省に睨まれていたのです。容易なことでは講座増設の要求に応じてくれそうにない。そこで私は学科体系を立て直す必要がある。それには経済学と経営学と科を2つに分ける方法がある。2つの科にそれぞれ理論、政策、歴史を中心に科目体系を立て、ここが足らんからこの講座をくれ、あそこが足らんからあの講座

をくれという風に要求しないと駄目だということです。それで兎も角了解を取り付けました。ただし条件つきです。将来経営学を経済学部から独立させるということは全く考えない。あくまで経済と経営は一体なんだ、マクロの世界とミクロの世界と、両方の面からみればじめて経済の実体がわかるのだから。それで独立させることは毛頭ない、ただ学問知識の上から2つにするのだという了解を取り付けました。しかし、すぐに実現しません。もう1年堀江がやったら実現するかも知れないということで、2年続けてやった、そういうわけです。

1年の終り頃にアメリカから招聘がきまして、3ヶ月間旅行せよということで、4月1日から3ヶ月間です。どうしようということを行いましたら、部長代理をおいていいからお前行ってこい、部長を辞任せんでもよろしいと。私は教授会を退席しまして、皆で自由に審議してもらい、その決議ができたので2年続けてやったのです。2年目もまた経営学科はできませんでしたがけれども、何年かして経営学科がどうやらできました。

角山 講座が増えたのですか。

降旗 あとに1講座増えました。

堀江 当時文部省に春山さんという大学課長がおられまして、経営学科じゃない、商科でしょうと。東大が商科なんですね。あくまで東大を基準にするものですから。いや商科じゃないんだ、経営学なんだと言ってね、随分わたり合ったですよ。

降旗 それはですね、ちょっと言わせていただきますと、商科であるか、経営学科であるかは大英断ですよ。学問の発達の上からみましても、そう言えますよ。

京大附属図書館長

角山 そのあと先生の大きなお仕事は図書館のことですね。

堀江 これはね、話し出すとたくさんのご事情があるんですがね。私が丁度、昭和38年の夏にコロラド州のエスティス・パークで行われた「日本における国家と企業」という題のセミナーに行っていましたら、電報が来まして、経済学部から図書館長に推薦するから引受けるかどうかとあった。お受けすると言いました。帰国したら当選していました、7月に図書館長に就任しました。ところがその秋に国立7大学の図書館長会議が京大の当番でありました。当然私が議長をやらなければならない。新任の何も知らない私が議長をやったものですからいい加減ですが、なんとかやったんです。しかしあとから聞くと、なかなか手際よくやったということです。それは兎も角、東大の図書館長が岸本英夫さんでした。この人が大学図書館の近代化ということに非常に熱心な人でして、それに私が尻馬に乗ったわけです。なんとか近代化しなあかんと。丁度その頃私は近代企業家という研究で多少油がのっていたところでした、それを身をもって実践しようというわけです。何で近代化ということを行い出したかという、大学図書館というのは

学部図書館と中央図書館とがでんでんばらばらなところが多い、ひとつのシステムに成っていないところが多い。従ってサービスはなっていない。それから情報を積極的に提供するということなく、受身である。また学生の学習と図書館とが密着していない。とくにそういう点のサービスが学生に密着していない。先程言いましたように私が30年にアメリカへ行きました時、各大学の図書館を見て思ったこともあったのです。図書館の地位という点は私のアメリカ旅行の目的でもありました。向こうの私学では図書館と寄宿舎と教会とが三位一体で、キャンパスの中心をなしています。

それで岸本さんと九大の統計学をやっておられる北川敏夫さんと3人が中心となりました。近代化のことは、7大学は勿論、全国国立大学図書館会議、地域では近畿の大学図書館会議がありまして、そこでの議題でありました。いろんなところへ行きました。天理へ行きますと、天理大学の図書館は非常によくやっています。しかしなかには各学部がでんでんに分かれているだけでなしに、各学科に分かれている。さらに各教授研究室にみな分散している。これでは「さあ」と言ったときに本は出ないんですよ。そこで京人にありましては附属図書館改善委員会というのを商議会とは別につくりまして、主に若手に出てもらって、経済学部は確か出口君に出てもらいましたが、図書館の現状を話し、改善の方途を研究してもらうことにしました。1年間かかりまして、それをまとめて『京都大学附属図書館報告書』(1966)という大判のパンフレットを作り、奥田総長に提示しました。各教授にもお配りしました。今でも図書館にありますね。

それに書いたことは要するに一言で言えば調整された分散方式 (Coordinated decentralization) ということです。すなわち、機能的に中央図書館を学習図書館兼保存図書館とし、学部図書館を専門図書館として再編成する。たとえば法学部と経済学部の図書室を一緒にして社会科学図書館という専門図書館にする。これによって本の重複買いは避けられるし、図書館の人員も少なく済むし、なにかも節約する代わりに、文献を増加し、サービスをよくする、そんなことを主張しておったのです。結局私の望み通りになったのは医学部の図書館だけでした。医学部は丁度 Medical Foundation から寄附金をもらい図書館を建てることになった。これは医学部の全体および病院をまとめたもので、出来た時は医学部という部の字を付けておられたのですが、あくまで部をとって医学図書館にして欲しいんだと強硬に談じ込みました。今医学部の図書館は部の字が削ってあるはずですよ。

山本 要するに京大中の医学に関する図書センターという考え方なんですね。

堀江 そうです。本館がもっておりました富士川文庫ももっていき、医学のものは全部あげる。医学のことであれば医学図書館に行けば何んでも解るんだということです。この考え方を割合解って下さったのが農学部でした。これが私がやりました主な仕事で

す。

その他に7大学図書館長の中心になって文部省に働きかけ、そこで出来たことは情報図書館課という一つの課が生まれたことです。その前は学術情報室かなんかがありましたが、それが形の上で課となり、図書館という言葉が入ったのです。もうひとつは指定図書費という予算が付いたことです。指定図書というのは米国の大学図書館に設けられているリザーブ・ブック・システムのことです。しかし文部省が指定して学生に読ます本だといっている人もいましたが、その程度の理解しかなかったのです。

それから大学図書館視察委員というのが出来まして、視察委員を6年程勤めました。方々の大学図書館を見て歩きまして、よい図書館は褒め、改善する点はこういうようにするとよい等を設置権者に言うわけです。国立大学であれば文部省の大学学術局長に、私学であれば財団の理事長にいくわけです。従ってこの委員は各大学では喜ばれました。来てもらうと改善につながるものですから。

上野文庫のこと

堀江 もうひとつ私の部長時代に忘れていたことがあるんですが、それは上野文庫のことです。上野文庫のことについては本当によく知っているのは出口君ですが、もらいに行くときに丁度私が部長の時でした。それは昭和30年に招かれてアメリカへ行った年のことです。出発前の3月の中頃で私は風邪をひいて寝ていたんです。大分回復期でしたが、当時の内藤（敏夫）事務局長から電話がかかかってきまして、朝日新聞社主の上野（精一）さんから新聞を引き渡すと言っておられるから行ってもらいたい、自分が介添えに行くからということで、私は起きまして芦屋の上野さんのお宅へ伺いました。図書室の簾（治郎左衛門）君はトラックで掛の人を4〜5名連れて行きました。そして第1回の引き渡しを受けたのです。何故経済学部が受けることになったのかをきいてみると、まず上野さんはご自身が新聞学、新聞史の研究家であり、また、新聞関係資料のコレクターとしても有名な人でした。この人が自分のところの書庫が一杯になり、なんとか処分しなければならぬので、どこかに寄贈したいと、そのことを主としてお話になったのは京大の総長をしておられた羽田亨先生でした。汐見先生も多少これに関与しておられました。とくに羽田先生のところへ京大で引き取ってくれと、羽田さんも京大でもらいたいと言われたのでしょう。ところで京大へもらってきて、何処へ置くかという、経済学部がよかろう、というは経済学部では終戦後から新聞学の講義を聞いておる。毎年新聞人、新聞研究者を呼び講義を聞いておる。法学部や文学部の学生にもそれを開放している、そこで経済学部が一番適当であろうということになり、経済学部がもらうことになったのです。そんなわけで私は上野さんのところから帰るなり、京大病院の病室へ行って羽田先生にお目にかかり、第1回の引き渡しを受けました、ど

うかがご安心下さいと報告申し上げました。先生はベットのの上に起き上って喜んで下さいました。そして間もなく私はアメリカへ発ち、ワシントンを振り出しに、フィラデルフィア、プリンストンを経てニューヨークへ来ました時に家から手紙が来まして、羽田先生がお亡くなりになったことを知りました。

上野さんという人は親切なお方で、これだけの書物があるから整理費が必要であろう申し出よとのことで、申し出ますと、月に何万円かを毎月小切手で下さることになりました。これをもって整理費に当て、残りは新聞関係の図書や資料の購入に当てることにしました。精一氏の没後、御長男の上野淳一氏（京大経済学部出身）が引き継いでいて下さるといことです。上野文庫は経済学部にとって大変な宝だと思っています。

角山 長い経済学部の歴史の中で戦後最大の文庫ですね。

堀江 そうです。あれも先程ふれましたように展示会をやったり開いてほしいと思います。その当時なんとか上野さんに報いる方法はないだろうか。報いる方法としてひとつは上野さんに学位を出すということがある。これは次の事務局長横田さんでしたかに相談に行きました。そうすると京大にはその慣例がないといって断られたんです。もうひとつは新聞学についての講座を置くことです。経済学部にはその学問体系の上から見て、新聞学講座を置けない。それで文学部と法学部と経済学部とにまたがったような講座を置けないものかと文部省に尋ねてみたんです。新聞学部をつくるわけではなく、ブロック講座としていくつかをつくる。これもとうとう実現せずじまいでした。私としては、上野さんの御好意に対して何か報いなければならないという気持ちで一ぱいなんです。

同窓会のこと

角山 これで上野文庫の経緯がよくわかったのですが、ここでもうひとつ、同窓会について先生は深いご関係があると……。

堀江 ざっと申し上げますと、昭和34年に創立40周年記念事業をやりました。『経済論叢』とは別に『経済学部創立40周年記念論文集』を出しました。それに合わせて大講堂を借りて卒業生の懇親会を開きました。その時の席上、大田垣士郎さん（関西電力社長）が同窓会をつくれと言い出したんです。後からけしかけたのが古林喜楽さん（神戸大学学長）です。この人たちがとにかく一つ同窓会をつくらうといい出した。これも私がアメリカでの財団などの実例を知ってのことなのですが、大学が卒業生とお互にサービスをしあうという一つのチャンネルが必要である。こちらばかりが寄附金をとるのでなく、こちらも卒業生にサービスのチャンネルとして同窓会が必要ではないかと思ってもいたのです。たまたま40周年記念のいろいろな事業をやるについて私が委員長をおおせつかった。委員長をやるついでに同窓会づくりもお前やれと経済学部からおおせつか

りました。それで地元の京都の卒業生を集め、東京でも有志に集まってもらい、そこへ出かけて行く、名古屋へも、神戸へも、大阪へも、福岡へも行きました。それらの都市で卒業生に集まってもらい、同窓会をつくりたい、趣旨はこうこうだと説いて廻りました。それじゃよからうということで同窓会が出来たのです。それが何年か続きました。今は残念なんです、消えている状態です。それで最初は本庄先生を会長に仰いで、先生が80歳になられる位までおってもらい、私が庶務主任みたいなことで続けてやっておりました。

角山 それで現在の京大全体の同窓会に発展したという……。

堀江 そういうわけでもないんです。途中で棒を折ったんです。要するに経済学部の事務室が服務規程以外の仕事はやれなくなり、結局同窓会の事務局がつぶれてしまったわけです。

東南アジア研究センターのこと

角山 ここで再び先生のご研究の分野での業績に入っていただきたいのですが、その前にあとひとつだけ学内行政として関係なさったお仕事のうち、東南アジア研究センターのことについてお話し願います。

堀江 あれはいつの頃のことでしたか、昭和39年頃ですか。どういふことで私が東南アジア研究センターに関係したのかこれはわからんのですが、文学部の臼井(二尚)さん、人文科学研究所の岩村(忍)さん、それから農学部の本岡(武)さんたちですね。東南アジア研究ということで岩村さんが中心となられまして、Integrated Studies ということを念頭にしていました。その時 Human Relations Area Files の Regional Study という資料集が出され、フォード財団のお金で買いました。この方の折衝は岩村さんが全部やりました。そのため渡米もしておられます。そしてフォード財団から金をもらい、そのフェイルを買う。毎年金を払うのですが、ところがドルは国内では使えない。東南アジアへ出ないと使えない。国内で何かしようと思うと円が要る、ドルを使うために円が要る。それで寄附金集めをやったんです。随分大阪の会社を廻りました。そしておそらくあの当時に4～5千万円集まったかと思います。ところがもう少しという時に京大の70周年記念事業の募金が始まり、この募金以外はまかりならんとなったのです。しかしとにかく4～5千万円集まりまして、ドルを使えるような形にしてタイ国に連絡事務所 (liaison office) を置いたのです。タイからも人が来ました。タノムというのち首相になった人も来ました。またいろいろなことがありました。ビルマで文学部の棚瀬君という世界的学者を死なせました。また水野君というのがタイで亡くなりました。本岡さんもある意味で犠牲になられました。ともかく地に付いた調査、現地調査に重点を置く、それで研究員を派遣する。liaison office はそのためのものなのです。現地調査は村

に入り込んで、その生活習慣、食物などの実態を調べる。その結果が東南アジア研究センターの雑誌に出る。そういうことを日本で他にやっているところがない。長崎大学で多少やっているということで研究提携がやれるかどうかを打診するために、私は長崎へ行ったこともあります。何故センターという言葉を使ったのか、そのとき東南アジア研究所という案も教育学部の相良（惟一）教授あたりから強く出たのです。ところで私は言ったんです。研究所にするとまた城が出来、そこには城壁が出来て、他から入れんようになる。研究所はいかん、学内は勿論、学外からも皆な自由に入出入りできるような研究組織にしなければあかんと。それには研究センターの名称がいいんじゃないかと。そこで同意を得まして、文部省と掛け合いに行ったんです。とうとう文部省では法令を改正してくれまして、センターの名称が使えるようになりました。東南アジア研究センターがその最初です。私の東南アジア研究センターに残した功績としましては、Integrated Studies で皆に開放し、お城をつくる研究所でなく、研究センターにしたことかと思っています。

研究業績

角山 大変長くお疲れでしょうが、残っています先生のご研究の分野について、先生の学内行政とは別の大きな業績がございますので是非お話を伺っておきたいと思えます。

日本の近代化と近代企業家の研究

角山 それで先程日本経済史研究の、しかもご出発のところだけをお伺いしたのですが、先生の日本経済史研究では『日本資本主義の成立』が昭和13年に出ております。これを読んでみますと、あの当時の講座派、労農派の論争に若干影響を受けておられると思いますが、それを戦後乗り越える形で『明治維新と経済近代化』（1963）という著書に展開していくのだらうと思うわけなんです。その媒介となったのは何だったのでしょうか。

堀江 これは先程申しましたアメリカ旅行なんです。その時私が逆に聞かれたことは後れておった日本がどういうわけで速やかに近代化することが出来たのかということなんです。この質問を到る処で受けたんです。それは要するに、いわゆる developing countries のことが問題になっておった。それにはお手本になっているものがあるはずだと。

角山 それは昭和30年ですか、早いですね。

堀江 それが刺戟になりまして、日本の近代化 modernization ということがどうして速やかに出現しえたのかということを中心にして研究しました。

角山 その当時はそんな考えはなかったんでしょう。つまり日本は何故いつまでも封

建的であるということでしたから。

堀江 私がそれを書いたのは野村兼太郎さんの選暦記念論文集の『封建制と資本制』の中です（「日本の近代化の問題」）。そういうことから私の日本経済史の目の付けどころが、変わったということです。

この昭和30年の旅行ですが、飛行機の中でもそれを聞かれた。その時はまがりなりにも答えたんですが、難点がたくさんありました。それから少しずつ考えてきまして、例の近代化の担い手があるはずだということ、つまり企業家の問題だということです。この問題に手をつけたのが昭和34年ぐらいでした。そのころ高坂正顕先生（哲学者）を中心に、人文研の坂田吉雄君など4、5人のグループがありまして、坂田君はもっぱら明治維新の人物研究をやり、私も人物研究として鹿兒島藩の石川正龍、南部藩の大島高任、この2人を日本の近代企業家の先駆者として位置付けまして、『経済論叢』に書きました。

昭和36年に社会経済史学会大会が滋賀大学であって、その前に江頭さんから共通論題について相談を受けました。私は近代企業家の発生というようなことは問題にならんだろうかと言ったところが、よかろうというので、東京の本部へ連絡をしてもらい、それが採択された。言い出しべいということで、私がオーガナイザーとなり、中川敬一郎君、北村次一君、鳥羽欽一郎君、伝田功君、服部一馬君、佐伯有一君らにドイツ、アメリカ、日本、中国などについて分担、報告してもらうことになりました。私はその時シュンペーターとかアーサー・H・コールとか、アシュトンとか、Ch. ウォルソンとか、レードリヒとか何人かの論述を読みまして、それをまとめて問題提起致しました。それはのちに『近代企業家の発生』という本にし、昭和38年有斐閣から出しました。そのように近代化の問題に関連して近代企業家が出てきたわけです。

角山 その後この問題を継承して展開してくるのが日本の経営史学会ということに。

堀江 いやいや、それはちょっと烏滸がましいですが……、それが一つの機縁にはなりました。私も経営史学会の創立関係者の一人に加えられたのはそのことからです。

角山 その当時企業家というものを特に経済発展の担い手としてみる見方というのはぼつぼつ出ておりましたね。『経済主体性講座』とか、東畑精一さん、中山伊知郎さんのお仕事で……。

堀江 シュンペーター系統です。

「家」の問題

角山 それをその後、先生は企業家論だけでなく、先生が戦前から考えておられた「家」の問題と関係させて、例えば日本の財閥における企業家と言いますか、日本経済の発展の中で非常にユニークな特色をもつもの、とくに最近では日本的経営と言われる

問題に先生なりの一つの視角というのがある。つまり「家」の問題であると思うんですが。

堀江 家の問題になるとまた話が少し古くなるんです。終戦直後、日本が何故アメリカに負けたかということから始まっているんです。向うは市民社会です。それで愛国心というのは愛社会心からくる愛国心で。日本のはそうじゃなく、天皇に対する忠誠ということからくる愛国心です。社会の進歩からみて、どちらに味方するかというと前者に味方する。それで負けたのは当たり前だということです。丁度その頃お花（華道）の家元だったか何かが問題になっていた。そこで家元とは何か、家とは何かということで、私は家と村と国と三つの範疇、それを繋ぐものとして封建制というのを分析して、日本が何故民主化に立ち遅れているかということをやテーマにした論文を『人文』という雑誌に載せました。この雑誌は文部省のつくった人文科学委員会が出したものです。私は何故かその委員に入れられていたんです。それで一度原稿を出せと言われ、それを論文に出した。それが「歴史的に見たわが国民生活構造」です。

それから家の問題に入ったのです。それを今度は家的な構造をもった国民生活というものが近代化過程においてマイナスに作用したか、プラスに作用したかということになるわけです。そこでマイナスに作用した面は勿論あるけれども、プラスに作用した面もある、それは日本の企業家がシュンペーター流の自己中心的な立身出世主義ということとでなしに、自分が働いている事業そのもののため、家のため、あるいはもっと広く国のためということと自分の立身をみる。そういう企業家です。これをラニス教授は、community-centered entrepreneur と言っている。それが日本の企業家の特徴だと。ここに日本の近代化と家とが結びつく、こういう風な結論に達しました。

今日の日本の経営の特徴は集団主義にある。集団主義なるものはいろいろな面を持っています。大体就職と言うことからして、日本では就職じゃなくて入社なんです。愛社精神とかいろいろ言います。それでは一体そのルーツはどこにあるのかということを探ねると、岩田（龍子）さんのムラ説も納得できないし、津田（真澄）さんの戦後突如として現われた共同体論も私には納得できない。やはり事業一家的なものが、家という考え方が出て、貫ぬいている。しかも事業一家という言葉は決して古い言葉じゃない。戦時中の産業報国会の思想の中に出ました。その中から出た事業一家的集団主義という風に自分は位置付けています。

山本 今でもこの事業一家的集団主義についてのご研究をつづけておられますが、中心の御関心はどの点でしょうか。

堀江 つまり日本の雇用慣行である年功序列や終身雇用とか、労働組合の企業内組織や経営参加とか、昔ありました経営家族主義など、これらの事項の時代的な流れを勉強

しているわけです。

角山 丁度先生の退官記念講義におこなわれたもの……。

堀江 そうです。退官講義で「日本経済史における『家』の問題」というのをやりました。このテーマは早くから決めていました。私としては会心の講演でした。あとから天野貞祐先生から、家についてああいう見方があるのかという手紙をもらいました。また先程言いました韓国から来ていた安君からは、あの話を聞いてびっくりした様子でした。朝鮮にはあのような家はないんですね。台湾からの留学生に話しても解らない。ベトナムから来ている人にも解らないんです。それらの社会は非常に個人主義的なんです。もっと個人に分かれています。それで均分相続でしょう。日本の昔は家そのものが一種の株になっている。徳川時代には法人格を認められておった。明治の民法ではさすがに法人格は認めないことになりましたけれども、しかし家督相続という形で家は継承せられ、政策的にも、家を継承しやすいように、家督相続の場合の税金は安くせられていた。家の廃家、絶家、再興を民法で規定していました。家の考え方は民法に残っている。しかし社会の流れというものがそういうものを段々に否定して民主化してきているのです。きているんだけれども、それが企業の経営とか、労働組合とかに及ばずに事業一家という形で、戦時中はむしろ強化されて、戦後に及んでいます。労働組合では戦前にホワイトカラーは入っていなかった。それが戦後入るようになったんです。産業報国会が出来た頃、ホワイトカラーとブルーカラーとが睨み合いしたりしました。それが段々一緒になってきて、戦後は一本になりました。こういった過程をみますと、産業報国会の力というものが無視できない。つまりホワイトカラーを労働組合に入れたのは産業報国会でしたから。

山本 戦後の一つの労働組合のあり方を決定する要素にそういうことが考えられるのじゃないでしょうか。

堀江 私はそういうように見ているのです。

統計数字を利用した研究

山本 先生のお仕事は勿論先程から何回となくふれていますが、アメリカ経済史の分野とそれからいろいろ授業をおもちになったうえで概説書と言いますか、一般通史のお仕事もあるわけですが、最後に私の興味に引きつけて少し言いますと、方法論としてですが随分お若い頃から数字、経済史における数字、今日で言いますと数量経済史という言葉がありますが、早くから統計数字というものをきちっと使ったお仕事をしていく、ないものであれば自分で統計数字を見つけていこうというお仕事があります。この点で先生が一番早く書いておられます。例えば早い方は「両と円との関係に就て」に始まり、「アメリカ経済の発達と移民の消長」。戦後に書かれた「明治前期の国際収

文」など……。

堀江 そのことについて申しますと、最初に言われた「兩と円との關係に就て」は、大学院に入ったとき、沙見先生の演習に出席していたところが、明治の初めの話が出てきて、円と兩がどんな關係があるかと聞かれました。ひとつ調べてみましょうということで、やったところが、あの当時は1兩イコール1円と換算してよろしいということになったのです。

統計を扱うようになったのは、先程でました統計学のツァーンとかコッチとかの大家が京大を訪れた時なんです、その時『經濟論叢』で統計学論文の特集号をつくることになったのです。私も「アメリカ經濟の發達と移民の消長」というのを書いたのです。それはどういうことかと言いますと、丁度1870年代から80年代にかけてのころ、アメリカへの移民が新旧交替するんです。はじめの旧移民というのはアングロサクソンと同じような西および北ヨーロッパ諸国人、それから来るのが新移民といって東ヨーロッパおよび南ヨーロッパ諸国人です。そのころアメリカは丁度フロンティアがなくなり、西漸運動が終る時期です。そこで両方の移民が演じる役割が違ってくる、それを数字で書こうということで書きました。ところがそんなものは統計学的研究じゃないということで、その特集号からオミットされました。しかし次の号にそれが載りました。これが私の統計数字を取り扱った研究論文の最初だと思っています。それから日本の經濟發展に關連して、外資輸入の問題に入ったわけです。論文を歐文紀要にも載せました。そうしている間に、日清戦争の頃に日本は國際貸借のうえでプラスもなければマイナスもない状態であったということをアメリカ人が書いているのを知りました。実際はどうなんだろう。明治の始めはきつとマイナスのはずなんだがと、そこで松方さんの著述などいろいろなものを引っぱり出しまして、國際収支上の費目を並べあげて、ないところの数字を全部入れてみたところがそれに略々近いところが出てきた。つまり國際貸借上プラスもなければマイナスもないということです。これを『社会經濟史学』に載せたのです。これまでにそんな仕事をやっていたのは文学部の石橋五郎という先生でしたが、それを纏めてやったのは私がはじめてです。

山本 それが切っ掛けになって建元（正弘）先生などが……。

堀江 そうです、建元さん、馬場（正雄）さんがこれを取り上げてね。そういうことでは、あれはかなり刺戟的な論文でしたね。

それから山本君あたりが入っている數量經濟史研究会、慶応の西川俊作さんとか、連水融さんとかになるのですね。この人たちが書いたものは必ず私は頂戴するのです。ありがたいことに。私が最後に出しましたものは甲南大学の山本君の追悼論文集に書いた「維新後の經濟發展とインフレーション」（甲南經濟学論集）です。日本の經濟發展と

いうものがインフレごとに段階的に発展する、それを数字で説明しました。そういったことで私は何も統計学が好きやからやったんじゃないしに、実証的にやろうとするとやはり数字を使わなければならないという已むに已まれぬ必要から来たことであります。従って数字を統計的に、従って数学的に作為してどうするということは、私は全然出来ない、ただ数字を援用するというそれだけです。

角山 それにしても、今のQEH(数量経済史)まで大きな影響を与えるようなひとつの先生の草分け的な、刺戟的な論文ということは確かなことですね。

堀江 まあ、それはその通りだと私も思っています。

角山 その点では企業家もそうですし、家もそうですし、問題提起が先生はたいへん上手なんですね。

堀江 あとが悪いんだ。

角山 あとは若い者がやるんですから。

堀江 そう、そのつもりなんですよ。

角山 とにかく先生と話していると、刺戟的な問題提起が次から次へと出てきまして、先生を中心とした話し合いが一つのサロンみたいになる。サロンというのは私は特に結論があるんじゃないく、自由にお互に思い付きで意見を交換する場であって、そのサロンからアイデアが出てくる。憶えば先生の処へよく若い時に集まって先生を囲んで談論風発、夜遅くまでやりました。それによって若い時に多くの刺戟を受け、いろいろお世話になりました。

先生には京大をご退官されまして以後、京都産業大学でいろいろ大きなお仕事をなさっておられるわけですが、そのところは今日の座談会からはぶかせていただきました。そういうわけでこの辺りで終らせていただきたいと思います。先生には長時間ありがとうございました。